編 集 後 記

永田勝彦先生が2019年4月2日，入学式前日に亡くなられ，早1年半が過ぎました。同年6月にゼミ出身者が呼びかけ「お別れの会」を開き，その際，先生のご功績を振り返るものを残したいという声が上がり，このたび「追悼号」を発行する運びとなりました。

田実学部長の巻頭言では，1955年に北星学園女子短大に着任，1962年に文学部社会福祉学科創設以来41年間北星とともに歩まれた先生のご功績とお人柄を紹介して下さいました。また先生の退職される年に着任した文学部の蓑内先生からはラグビー部顧問を引継ぎ，以降のラグビーを通した先生との交流を振り返る文をお寄せ頂きました。

永田先生の在職中に社会福祉学科心理学コースに着任された大坊先生には特別寄稿を依頼しました。「永田先生との繋がりのきっかけとなった，援助行動，社会的迷惑行動，社会的スキルなどのことを共生，共助にも通じる意味を込めて」執筆下さいました。さらに本学大学院を修了して教職に就いた松原先生から民生委員制度の前身といわれる「済世顧問制度」に関する歴史研究の投稿がありました。民生委員は永田先生の関心テーマの一つであり，テーマの継承を実感します。

編集委員として先生の御略歴や社会活動そして研究業績をまとめる作業を通して改めて発見がありました。一つは，心理学を専攻された先生が社会福祉学科で教鞭をとる中で，研究テーマを民生委員や福祉専攻学生や住民の福祉意識に大きく移行されたことです。二つ目は，学科創設や学部長の歴任等でご多忙を極める中，社会福祉学会での研究報告や論文執筆を，定年退職されるまで続けられたことです。

特に共同研究という方法に先生の特徴が有ります。社会福祉学科スタッフとともに「福祉専攻学生の態度の変容」についての研究に取り組み，当時の教員間の相互理解や凝集性が高まったと推察します。さらに先生のライフワークである「福祉意識の研究」については，態度尺度の構成から始まり，属性要因との関連，政治意識や援助行動との関連などを実証的な手法で進め，社会福祉学会の年次大会で継続的に発表されています。先生のテーマを，卒論の学生や研究生との共同研究として取り組み，社会福祉学会において報告させるというスタイルをとっておられました。学部を卒業したばかりの学生を，学会報告をできるまでに指導することは並大抵の労力ではないと今になって思います。卒業生や研究生は共同研究を通して，研究内容はもちろんのこと，学問に臨む態度など多くのことを学ん

だと思われます。

永田先生は，常日頃「私は福祉の素人だから」とおっしゃり，続けて「福祉の連中は皆が福祉的であることが当たり前と思っている」という言葉が耳に残ります。先生のライフワークである「一般住民の福祉意識研究」は，人権や援助の大切さを前提にしながら実証的な手法で現状を分析されました。そこから実践や研究をスタートさせる事の大切さを，私たちに示唆されました。現在，社会福祉の領域では複雑な社会問題が山積しており，国が先頭を切って住民の福祉的意識に期待を寄せる「地域共生社会」の形成を進めています。今こそ少し立ち止まり，永田先生のご研究を振り返ることが肝要ではないかと考えます。

先生のご冥福をお祈りいたします。

追悼号　編集委員　池田雅子